

魂 プロの背中

5月17日。2か月半ぶりに訪れた福島県郡山市の今泉眼科病院は、東日本大震災で損壊し、5階までの建物全体が工事用シートで覆われて、一見それとわからないほどだった。

「結構、やられたな」。年に10日ほど、ここで眼科手術を請け負う服部匡志(47)は、被害は想像以上だと感じた。

きょうの仕事は、2件の白内障手術。背広姿のまま手術室に入る。無言で手術着に着替え、ゴム手袋をはめると、服部はすぐ手術用顕微鏡に向かった。眼科では比較的簡単な手術とされるが、1万件超の経験を持つ服部の手並みは圧巻だ。

極小のメスを茶色く濁った水晶体に差し入れ、患部の硬さを指先で確かめつつ、適切な深度でぴたりと止める。次いで、切開部に超音波を発する筒状の器具を挿入した。それで患部を碎

き、取り出す作業は5分ほどかかるのが通例だが、まばたきもしない集中力で、服部の処置は常に1分以内。迷いも無駄もない手業は、出血や痛みを最小限に抑え込む。

「さあ。もう大丈夫」

手術台で患者の女性が拍子抜けしたように表情を緩ませた。

服部は孤高の眼科医だ。開業医でも勤務医でもなく、大学病院の医局にも属さない。各地の病院で手術を請け負って資金を稼ぎ、ここ10年来、眼科治療の

技術が遅れたベトナムに渡っては、貧しい人たちに無償で手術を続けている。

ベトナム通いを始めて間もない頃、資金調達に苦労していた服部に、「うちでやらないか」と仕事をくれたのが、今泉眼科

ビの話は言いづらからう。ここは自分から申し出るべきだ。服部は切り出した。

「先生。年内いっぱい、給料なしで働かせてもらえないでしょうか。手術、何件入ってもかまいません」

被災地へ恩返し of メス

今泉は目を潤ませてしばらく黙っていたが、「ありがたいことです」と言う、頭を下げた。服部が今泉の手を握った。

病院の院長、今泉信一郎(70)だった。ベトナムやラオスの医師を受け入れ、国際交流に理解があったが、何より服部の腕にほれ込んでくれた。以後、服部は他の病院の紹介も受けるようになり、活動は軌道に乗った。

だが、恩人の病院は3月11日に起きた震災で棟が壊れ、入院患者の受け入れが不能となった。収入減は深刻だという。

手術を終えた服部が事務室に出向くと、ボード上の非常勤医師7人の名前がすべて消されていた。今泉と顔を合わせる。ハク

夕刻、今泉病院を後にした服部は、郡山の駅前通りを歩いた。震災のせいだろう。以前に比べて街のネオンが寂しい。無報酬での手術はベトナムでの活動資金の一部を失うことになる。けれど、今は被災地の、恩人の役に少しでも立ちたい。

街のあちこちに、「がんばろう福島」の垂れ幕が掲げられている。この地が未曾有の災害に見舞われた日、服部はベトナムの病院で一心に顕微鏡をのぞいていた。(敬称略)

海を渡る赤ひげ ①



震災で壁が損壊した病院内を見回る服部さん。手術の必要な患者が入院できない非常事態に言葉を失った(17日、福島県郡山市で)＝竹田津敦史撮影

ご感想を、〒566-0865 (住所不問) 読売新聞大阪本社社会部へお寄せください。ファクスは06-6669-0433、メールはosaka2@yomiuri.com.jp。